

第45号

図書館報



津山工業高等専門学校

未知なる図書との遭遇

インターネットの発達で、図書の購入方法もずいぶん変化した。通販サイトで目的の図書を検索して購入手続きをすれば、翌々日には自宅に届く。居ながらにして目的の図書が手に入るわけで、便利なことこの上もない。こんなものが普及すれば、いわゆる街の本屋さんが苦戦するのも当然だ。昔は大きな駅の前には必ず本屋があったものだが、今や、津山駅前にも岡山駅前にもなくなってしまった。



図書館長 杉山 明

それが経済競争による淘汰の結果なら受け入れるより仕方がないのだが、街の書店には目的の図書を購入する以外に、もうひとつ重要な役割があったのではないかと思う。即ち、未知なる図書との遭遇、とでも言おうか、つまり自分がそれまで思ってもいなかった書籍に偶然巡り会い、ご縁ができるという、出会いの場の提供ということだ。

例えば私の手元に「納豆大全」という本がある。特に納豆が好きなわけでもなく、ましてや納豆屋を開業する気もない私がもとよりそんな本に興味があるはずもなかったのだが、時間待ちで入った岐阜駅の2階の本屋で何となく背表紙を眺めているうちに、魔が差して買ったものだ（ちなみにこの本屋もうありません）。中身は、日本全国で販売されている納豆の味だの、使っている大豆の種類だの、ラベルのデザインだのを論ずるという、実に下らなく、何の役にも立たない本なのだが、これがけっこう楽しい。もう十年以上前に買った本だが、今でも時々引っ張り出してパラパラとページをめくっている。まさしく私はあの時「納豆大全」と巡り会ったのだと思う。

街の本屋さんが減少の一途をたどる中、もはやこんな本との出会いを提供できるのは、図書館だけになったのかもしれない。そういう意味で言えば、閲覧室のない電子図書館のようなスタイルには賛成できない。私はやはり、ほこりじみた書庫に並んだ背表紙を眺めていたいと思う。

— CONTENTS —

先生お薦めの本	3
図書委員活動報告	7
ビブリオバトル・交流会	9
校内読書感想文コンクール	10
ご存知ですか、図書館の使い方	14

先生お薦めの本

先生から学生へのお薦めの本を紹介します



機械工学科 福田 昌准

『仕事。』

川村 元気：著（集英社）

日本の「ものづくり」を支える技術者として高専の卒業生への期待は高く、就職も好調を維持している。しかしながら、就職し社会人生活が続いていくうちには、経験したことのない困難や課題に直面し思い悩むこともあるであろう。それらを克服し、前進するヒントになればと思い本書を紹介する。

著者は、「仕事には、二つの種類がある。一つは、金をもらうための仕事。もう一つは、人生を楽しくするための仕事だ」と言う。そして人生を楽しくするための仕事を、「仕事」ではなく「仕事。」と呼んでいる。同じ仕事をするなら、金のためだけでなく生きがいを持って楽しくしたいと誰もが思うのではないか。学校での勉強や部活動と同様、いやいやでは効率も悪いし、身に付かないだろう。

そこで、「仕事。」について考えるために各界の最前線で活躍している12人の先達と対話を重ねて生み出された成果が、この対談集である。登場人物は、山田洋次、沢木耕太郎、秋元康、糸井重里、篠山紀信、横尾忠則、坂本龍一ほか錚々たるメンバーだ。

筆者は1979年生まれの映画プロデューサーで作家だが、対談前の準備が実に入念である。相手の経歴はもちろんのこと作品等を徹底的に「予

習」して臨んでおり、この真摯さに相手は信頼を寄せ、自ずと胸襟を開いたのだろう。

今や大家・巨匠等と呼ばれる方々も、例外なく挫折や下積みの苦労を経ており、苦しいときが逆に新たなチャンスとなることを教えてくれる。また一般的に、何かの分野で社会的地位や名声を得ると、それを守ろうと安全第一を心掛けがちになるが、彼らが現状に満足せず、さらなる向上を目指して新しい分野に挑戦し、仕事や活躍の場を広げていった話は示唆に富む。

数々のエピソードに加え、決断が必要な時に背中を押してくれそうな言葉も盛り沢山だ。ものづくりに対する坂本龍一の思いを紹介しておこう。「日本では昔から『上ばかり見ちゃいけません』と言いますけど、ものづくりに関して言うと、下を見て満足していたら、そいつは終わりですよ」。

ところで、誰しも「もっと〇〇しておけば良かった」とか、「選択を間違ったかな」と感じることがある。そんなときには、秋元康の語る「二つの道があったとして、慎重に、間違っちゃいけないと思って選んだ道でも、人間は間違えてしまうもの。常に正解の方になんか進めないんだよ。だから、間違った道を行っても、戻ってくる力さえ磨いておけばいい」という言葉を思い起してほしい。

そして、安全、平穏な道ばかりでなく、ときには思い切ったチャレンジをし、それぞれの「仕事。」を見つけてもらいたい。

電気電子工学科 石辺 信治

『先生、イノベーションって
何ですか？』

伊丹 敬之：著（PHP研究所）

私の本の選び方は、その時々自分の環境・状況に左右され、政治の裏話に夢中になったこともあり、経営本・著名人の自伝に凝ったこともあり、司馬遼太郎の本にはまったこともある。先日、『先生、イノベーションって何ですか？』という本が目にとまり、「もしそう聞かれたら、私自身はどう答えるだろう？」と思い手に取った。

この本は、著者と5人の女性参加者による“勉強会”の対話内容を書きとどめたもので、参加者の基本的な質問に著者がわかり易く答えている。この本によると、イノベーションとは、優れた技術で人々の生活・仕事を大きく変えるもの。ただ、特別なものではなく、我々の生活は過去のイノベーションの成果（電気、鉄道、工場の設備など）に囲まれている。私は、イノベーションに“一発ホームラン”のイメージを持っていたが、この本は、イノベーションとは“ヒットの累積（技術の連鎖）”であると言っている。過去からのつながりの中で萌芽が生まれ、誰かが弾けて加速する。スタートを切った人と、ゴールをした人は注目されるかもしれないが、バトンを中継ぎする人も重要であると述べている。

確かに、IPS細胞も、ES細胞の技術やガードン博士のオタマジャクシの論文（オタマジャクシの腸からオタマジャクシを作った）が無くては生まれていない。ES細胞技術のベースがあった山中先生は、ES細胞では競争研究者が沢山いるため、他の研究アイデアを考えていた。その時に、ガードン博士の論文を読み、IPS細胞の仮説を思いついたという。私が長年従事していた送変電分野も、これまでの先陣の技術を学び、そこに新しい着想を加えてイノベーションが実現してきている。

そういう意味では、我々が教科書を勉強するのも、技術の受け継ぎである。学校で学ぶことは我々のゴールではなく、受け継いだ技術の上に新しい鎖を作ることが期待されているということを、改めて認識させられた。

電気電子工学科 嶋田 賢男

『ふむふむーおしえて、お仕事！ー』

三浦 しをん：著（新潮文庫）

私は、定期的に読書をする習慣がありません。以前、読んだ本に読書数の少ない教員が増えてきて嘆かわしいと書かれてあり反省しているところです。なので、どんな本を紹介しようかちょっと悩みましたが手札が少ないので直近で読んだ本を紹介させていただきます。

さて、この本ですがサブタイトルにもあるように仕事の紹介本です。この本の特長は、女性作家の働く女性たちへのインタビュー集であるということです。これは、どちらかというところだと思っています。男性対男性の話し合いよりも、女性対女性の話し合いの方が第三者から見聞きして楽しいし明快であると私自身が思っているからです。こんなことを書くと男性インタビュアーや世の男性に怒られそうですが・・・でもやはり、本を読んでみてその思いどおりで、どの会話も大変弾んでおり、笑顔まじりに皆さん生き生きと自らの仕事ぶりを語っています。また、その職業が、靴職人、ビール職人、染色家、漫画アシスタント、建設現場監督、大学研究員、フィギュアの企画開発、編集者などの多種多様であるところも特長の一つかと思っています。単純にこんな仕事もあるのかという発見とその仕事内容を知ることができました。

この本にある職業は、高専卒業後の進路の選択肢となるものばかりではありません。ですが、

「働くとはこういうことだ!」ということを伝える主旨で書かれていないため、実際に働いている人がどういう思いで仕事をしているのか、働くということの楽しさやつらさはどういったところにあるのか、ということを知るための本として学生の皆さんが読むのにちょうど良いと思います。職業について語っている方々はすべて女性ですが、女子男子関係なく学生の皆さんの進路決定の参考になると思います。

電子制御工学科 湊原 哲也

『女性マネジメント』

最大限に女性の能力を引き出す技術』

眞鍋 政義：著（扶桑社）

本のタイトルだけを見ると、経済に関する本か何かと思ってしまう方もいると思いますが、実は全日本女子バレーボールに関する本です。バレーボールに関心のある方であれば、著者名からピンときたかもしれません。そう、著者は全日本女子バレーボールの眞鍋政義監督、2012年のロンドンオリンピックで実に28年ぶりに全日本に銅メダルをもたらした名監督です。ただ、いくら名監督といっても、実際にプレーするのは、当たり前ですが、女子選手達です。この本で眞鍋監督は、女性はみんなポテンシャルをもっており、それを最大限に引き出すマネジメントの重要性について言及しています。

そんな女性マネジメントの本をなぜ私が読むことになったのか？そのきっかけは、顧問をしている津山高専女子バレーボール部の指導の難しさに直面したことからでした。男子は比較的単純なので、マネジメントはさほど難しくないので、女子は驚くほど複雑な生き物で、扱いが容易ではありません。私自身は学生時代にママさんバレー

のコーチを少しやったことがあったので、バレーボールチームのような「女性社会」の難しさは少なからず知っていたつもりでしたが、相手が高校生年代を含む学生ともなれば、さらに複雑でした。

この本を読むことによってすべての問題が解消されたかということとそんなことはありませんが、それでも、何も知らずに女性と対峙するよりも、女性のことについて「タイプ分け」をし、タイプごとに合わせた対応をすることによって以前よりもトラブルが減ったような気がしないでもありません。

今後の社会情勢を考えると、「高専女子」もさらに増えてくるものと思いますし、女性技術者も増えるということで、技術者であっても女性との関わりは増えてくるものと思われます。そんなときにこの本のような女性のマネジメント方法を知っていると多少なりとも役に立つかもしれませんね。

最後に、眞鍋監督によると、女性は「天然系タイプ（江畑選手、新鍋選手）」、「職人タイプ（竹下選手、佐野選手）」、「真面目すぎるタイプ（迫田選手、石田選手、狩野選手）」、「自立タイプ（山口選手、井上選手）」、「不器用タイプ（荒木選手）」の5つに分けられるそうです《（ ）内は銅メダルととったときの全日本メンバー》。読者の周りにはいる女性はどのタイプに属しそうでしょうか？その対処法にもし困っていたら、本書を読むことで問題解決できるかもしれません？！

情報工学科 松島 由紀子

『The Giving Tree』

Shel Silverstein：著（HarperCollinsPublishers）

今日、紹介するのは、1964年に出版された絵

本です。りんごの木と小さな男の子の物語です。この本は、読む人の年齢や性別、立場によって、あらゆる場面の受け取り方が異なるそうです。私は中学2年生の時にこの本を暗唱しました。そのおかげで、今でも文章のほとんどを思い出せます。普段は気にも留めませんが、ふとした時に頭の中に浮かびます。冒頭はこうです。Once there was a tree....

りんごの木と男の子はとても仲良しです。毎日、かくれんぼやブランコで遊んでいました。しかし時は流れ、男の子は少年になり、りんごの木と遊ばなくなります。青年になり、久しぶりにりんごの木を訪ねた男の子は、お小遣いをちょうだいと言います。中年になって、家が欲しいと言います。老いを迎えて、ボートで遠くに行きたいと言います。そしてその全てを、りんごの木は叶えていきます。実を持って行けばいい、枝を刈ればいい、幹を切り倒せばいい、そしたらyou will be happy. And the tree was happy. とうとう最後は切り株だけになりました。

このあらすじを知って、みなさんはどう思ったでしょうか。わがままだな。与え過ぎるのはよくない。りんごの木は本当にhappyかな。自分を犠牲に人助けをするのはすごい。学年が上がって後輩ができたなら、見方が変わるかもしれません。就職試験に合格したら、別の感想を持つかもしれません。先生方はみなさんと違った意見かもしれません。簡潔な話なので、たくさんの解釈が生まれるのだと思います。

この物語には、あと少しだけ続きがあります。すっかり年老いた男の子が、切り株だけになったりんごの木の所に再び戻って来るのです。そして、物語の最後はこう締めくくられます。And the tree was happy. ぜひ絵本を手にとってみてください。

一般科目 杉山 明

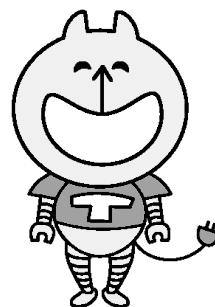
『史記』

横山 光輝：著（小学館）

中国は歴史の国である。三千年余の悠久の歴史を、中国の人々は克明に記録し、また誇りにもしてきた。「史記」「三国志」「十八史略」…日本人にも馴染みの深いものも多く、学生諸君にとっても身近な存在だろう。

ところが、興味を覚えていざ読んでみようと思っても、とにかく量が多い。もちろん原典では読めず、日本語に訳したり小説化したものを読むのだが、たとえば私が持っている吉川英治版「三国志」は全十巻もある。読み始めれば一気に読める面白さではあっても、初めてのトライには重すぎるだろう。

その点、これはよい。「史記」と言えば中国の歴史書の代表とすべき存在だが、何しろ漫画なので、手軽に、とっつきやすく、そして面白く読める。漫画だからといって、侮ってはいけない。春秋戦国時代から漢代に到る歴史の流れが分かるし、押さえるべきエピソードはちゃんと押さえてある。エッ？国語の教員のくせに漫画を薦めるなよって？…。いやいや、これをきっかけに中国史に興味を持ち、小説に進んで行ってくればいいのです。



図書委員活動報告

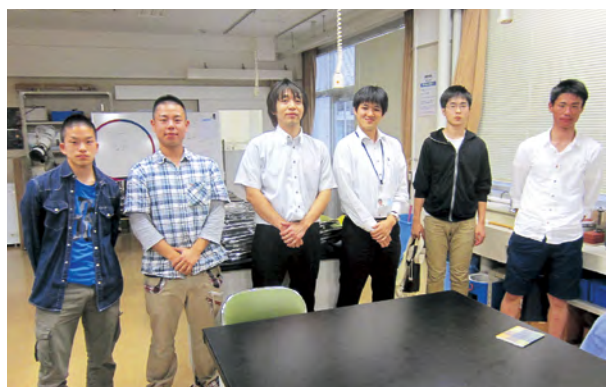
図書委員は、弥生祭催し物関係班、図書館利用・読書奨励活動関係班、ブックハンティング班、図書館報班の4班に分かれて活動しています



弥生祭催し物関係班

私たち弥生祭催し班は、10月31日、11月1日にわたって葉作りと古本市を行いました。

去年と引き続き行った葉作りでは、来場者の方々に自由にイラストなどを描いていただいたり、好きなテープを貼っていただいたりし、私たちの方で加工をし、記念品としてお渡ししました。当日は、家族連れの方が多く来られ、その人の個性や笑顔が溢れる葉作りとなりました。また、古本市では、各学科の先生方から多くの本をいただき、専門書を中心としバラエティーに富んだ本が集まりました。年齢性別問わず、特に学生の方がつい足を止めてしまうような古本市をすることができました。



今年も、2日間という短い期間でしたが、大変多くの方に来場していただき、葉作りと古本市を成功に収めることができたと感じます。頼りないリーダーではありましたが、支えてくださった先生方・班の皆様がこの場を借りてお礼申し上げます。

(機械工学科4年 井戸 雄大)

図書館利用・読書奨励活動関係班



私たち図書館利用・読書奨励活動関係班は、図書館をより多くの人に利用してもらうことを目標に活動しています。その主な活動内容はアンケートの実施です。今年は、本屋大賞作品の中で読んでみたい本、好きな本のジャンルとそのジャンルの好きな本、映像化して欲しい本、あまり読書をしていない人におすすめしたい本、一

ヶ月に読む本と漫画のそれぞれの冊数、といった内容でアンケートを実施しました。また、本科生全員にアンケートを行ったので幅広い内容を得ることが出来ました。ご協力して下さった学生の皆さま、ありがとうございました。また、そのアンケートの結果を元に、図書館入り口付近の書棚に学生おすすめの本コーナーを設けました。より多くの皆さまに利用していただけるよう、様々なジャンルの本を取り揃えましたので是非ご利用ください。(情報工学科3年 片岡 莉菜)



ブックハンティング班

ブックハンティングは図書館で皆さんに読んでもらいたい本を、図書委員が実際に書店まで出向いて選んでくるとい活動です。

今年は、8月には丸善岡山シンフォニービル店、12月には宮脇書店岡山本店でブックハンティングを行いました。どのような本を入れると図書館利用者が今以上に満足するかを考え、本を選びました。また、どのような本に需要があるかを調べるためにアンケートを行い、効率よく本を選ぶことができました。

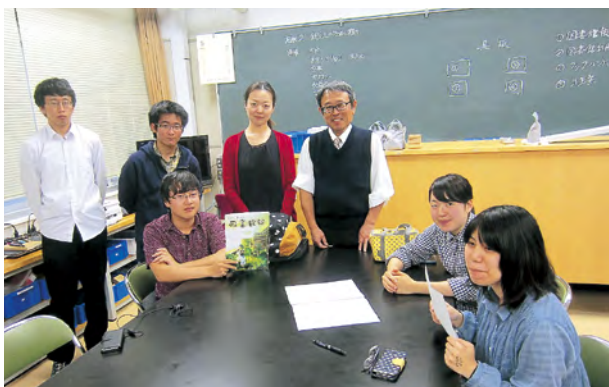
ブックハンティングで選んできた本は図書館に入って右側の棚にコーナーを設けていますので、手に取ってもらえると嬉しいです。

あまり図書館を利用したことがない人も、この機会に足を運んでみてはどうですか？

(電気電子工学科4年 唐川 祐一郎)



図書館報班



私たち図書館報班は、本館報を見てくださいる皆様が楽しむことができ、図書館に興味を持っていただけの内容に仕上げるために、班員で担当を決めて先生方への原稿の執筆のお願いや本館報に関する取材を行いました。

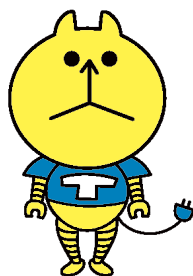
本年度は、ビブリオバトルの参加者に直接取材を行うなどのアイデアを取り入れました。

また、今回初めて図書館報班で一年生の読書感想文コンクールの審査を担当させていただきました。

本館報を編集するにあたって原稿を執筆していただいた先生方や、取材や執筆に協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

私はまだ二年生ですが、本年度の図書館報班の班長をさせていただきました。全てのことが初体験で右も左も分からないまま班長をさせていただいたので、班のメンバーや関係者に多々迷惑をおかけしたことがあると思います。しかし、そんな私を支えてくださった皆様にはこの場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

(機械工学科2年 坂本 直紀)



— 第3回「ビブリオバトル」に参加しました —

平成27年11月21日（土）に津山市立図書館主催のビブリオバトルが開催され、参加人数4人のうち本校から1名の学生が参加しました。

ビブリオバトルとは、各参加者が自分のおすすめ本を5分間で紹介し、それを聞いて一番読みたくなった本を観覧者・参加者による投票で決めるもので、津山市立図書館では今回が3回目の開催となります。

参加者にインタビュー.....

（参加者：情報工学科3年 片岡 莉菜さん）

Q：何の本を紹介されたのですか？

A：有川浩さんの「キケン」です。自分の好きな本だったのですらすら言えると思ったんですけど、話すことを考えてなくて、しゃべりたいことがしゃべれませんでした。

Q：参加しての感想は？

A：初めての参加で、くじのせいで順番もトップバッターで緊張しました。

Q：他の参加者の中でよかったプレゼン、読みたくなった本は何ですか？

A：「死神の精度」です！題名よりも読みやすい感じが伝わりました。普段読む本と違った印象を受けて、読みたいと感じました。

Q：最後にひとこと

A：ビブリオバトルは珍しい大会なので、参加できて良い経験になったと思います。また機会がありましたら、面白さを伝えられるような紹介をしたいです。



— 交流会が開催されました —

平成27年6月20日（土）に津山市立図書館で、津山高等学校図書部、美作大学図書館ボランティア、本校図書委員の交流会が開催され、16名（学生12名、教職員4名）が参加し、津山市立図書館見学などが行われ、他校の学生と図書を通じてとても有意義な交流を行うことができました。

来年度以降も同様の機会があれば、図書委員になった学生のみなさんはぜひ参加してみてください！！



校内読書感想文コンクール

1年生の読書感想文の中から図書委員が優秀作品を選出しました

第1位 自分らしく

1年4組（機械工学科） 広瀬 悠人

僕は、この休みに『人間失格』を読み、主人公葉蔵と自分が重なってとれ、自分自身について考えさせられた夏になりました。僕には弟がいます。僕は家族の中では当然、長男らしく振舞わなければなりません。また、学校や寮では1年生らしく、校外学習などに行けば高専生らしく生活しないといけません。人にはだれでも、立場や置かれている状況によってそれぞれ役割があり、その役割をうまく務めようと努力していると思います。僕は長男として、学生として、恥ずかしくないように生活してきたに過ぎなかったのですが、あるとき母に言われたことがありました。「あなたは どうしたいの？ どうありたいの？ どう見られたいのではなくて、自分の気持ちはどうなの？」その言葉の意味が最初はわかりませんでしたが、今回この作品の葉蔵の生き方に触れてみてまず頭に浮かんだことは、「本心」ってなんだろう。僕は今まで本心をさらしてきただろうか。というより、僕には本心というものがあるのかということでした。

大きい夢を語り、目をキラキラ輝かしていた幼児時代。目についたものには片っ端から触れて好奇心の赴くままのやんちゃな僕だったようです。しかし誰もが経験してきたと思いますが、いつの間にか周りの人の反応を気にするようになり、自分の感情を抑制し、無難に振舞うことが大人であると学ぶのです。そうすると、世間や両親の良しとする自分が一番心地よくて、僕は自分の役割を上手に演じるだけの子どもになっていたように思います。では本当の自分とは何でしょうか。もしかすると、知らない自分の心がどこかにあるかもしれないし、本当はもっと醜い心の自分が潜んでいるかもしれません。そう思うと怖くなります。僕は葉蔵の苦悩に触れた気がしました。彼は廃人になるまで、どうしてこんなに自分と戦わなければならなかったのでしょうか。生きる希望をなくした彼を見て、僕は彼は何のために生きているのか疑問に持ちました。彼が人間らしく生きていくためには、一体何が足りなかったのか。

たくさんの兄や姉を持つ末っ子として裕福に育ち、傍から見ると幸せな生い立ちの葉蔵でしたが彼の心は孤独でした。幸せとは衣食住が満ち足り、生活が安定していることではなく、誰かがいつもそばにいてくれる安心感、自分を理解してくれている安堵感、そして何よりも愛情を伝えてくれることが大切なのだと思います。彼がもし、愛情を全身で感じて育っていたとすれば、きっと違う生き方をしていたのではないのでしょうか。僕は今回母に背中を押され、弟に気付かされ、自分について見つめることができました。もし葉蔵を救うためにできることがあったとすれば、「あなたは決して失格じゃないよ」という一言を誰かが伝えることだったかもしれません。「人間」に「失格」なんてあるのでしょうか。世の中にパーフェクトな人間なんていません。一つ一つに「失格」の場面があったとしても、努力することによって少しでも目標の合格ラインに近づくはずだと僕は信じたいです。そして恥ずかしくても、人が人間として生きていくためにやはり「本心」を伝え合うべきだと思います。

自分の人生は、他人に合わせるものではなく、明確な自分の意志で選択しながら切り開いていくものだと思ふと葉蔵は僕に教えてくれた気がします。僕はこれから、堂々と誇りを持って自分らしく生きていきたいと思っています。

（太宰 治『人間失格』）

第2位 スクラップ・アンド・ビルドを読んで

1年3組（電子制御工学科） 中山 雅晴

私がこの本を読もうと思ったきっかけは、今年の芥川賞受賞作品が二作品あったことにある。本作「スクラップ・アンド・ビルド」と「火花」である。「火花」の著者が有名なお笑い芸人である、又吉直樹さんだったから「火花」が話題となった。そのため、「スクラップ・アンド・ビルド」はあまり取り上げられなかった。だから、自分でどんな作品なのか知りたくなった。

本作は、主人公である「健斗」が見たり、聞いたり、時には臭いをかいだり、触れたりして、感じたことが中心となって書かれている。また、その感じたことが細かく明確に書かれているため、読み進めることが楽しく感じた。

ストーリーは、認知症をわずらっている祖父は健斗や健斗の母に迷惑をかけてばかりで自分が情けないと思っているため、いつも、「はやく死にたい」と口にする。健斗は、祖父のその願いを孝行として叶えてあげるためどうすれば楽に祖父を死なせてあげるか考え行動するといったストーリーだ。

私の両親や祖父母が「死にたい」と言い出したら、どう対応すればいいのか考えた。死なせてあげるのと生きてもらうこと、どちらが最良なのかと。このように、読者にどちらが最良なのか考えさせる作品はよくある。しかし、私の中では、どちらが最良なのか本作では答えが出せなかった。なぜなら、本作は「死にたい」と思っている人側からの視点も書いてあるからだ。そのため、このように考えさせられる作品の中でも一味違うように感じた。

本作は、状況や出来事が現実でも起きるようなことで書かれていた。また、細かく書かれているため、その状況や出来事が想像しやすいため、スムーズに読むことができた。

本作で、最もおもしろいと感じたのは、祖父を死なせてあげるための方法として尊厳死を選んだ健斗が尊厳死を実現するために、祖父に過度な介護をする中で、健斗の心が変化していくことである。初めはただただと過ごす日々だったのが、祖父が衰えていくのを見て筋トレをはじめ、やる気の出なかった資格の勉強も励むようになった。それは、祖父のようににはならないという強い思いからくるものだった。祖父を衰えさせている中で、健斗は成長していくというところがおもしろいと感じた。

本作を読み終わってから私は、「火花」はまだ読んではいないが、負けなくらいおもしろく、読みごたえのある作品だと思う。

(羽田 圭介『スクラップ・アンド・ビルド』)

第3位 「キッチン」を読んで

1年1組（電気電子工学科） 笠原 萌子

祖母の家に遊びに行く度に目にしていたこの本。「おもしろいから読んでみんちゃい。」と母に言われていたが、この夏やっと本を開いた。母やおじが若い頃に読んでいたのか、かなりの古本だった。あまりにも衝撃的で、未知の世界のストーリーに私は少なからず、魅了された。

「私がこの世で一番好きな場所はどこだろうか。」こんな感じの文章を見ながら、私は「ゲームセンターとか、ずっと遊べられるところがいいな。」

と、考えていた。しかし、私の想像とは程遠い、全く別世界のものだった。それは、“キッチン”であった。

祖母が亡くなって、いよいよ一人ぼっちになり、真っ暗闇にいた「かすみ」は、田辺家で同居を始めますます孤独を感じたことだろう。真っ暗闇にいたかすみも、少しずつ人とふれ合い心を開いていく。その心の変化が、私を安心させていった。

両親を一人一人失ってしまい、自分しかいない寂しさと孤独な悲しみを感ずるってどうなんだろう。私には予

想がつかない。主人公も想定外だっただろう。世の中の人、好きで孤独を選ぶ人はいないと思うし、なりたいたいと思う人もいないはずだ。もし私がこの主人公のような立場になったらどうなるか。こんなことが、頭の中でぐるぐると渦巻いた。一人ぼっちになるのは嫌。今いる友達と離れるのは、もっと嫌。見知らぬ家族と一緒に住むのも嫌だ。でも、えり子さんの様に楽観的な同居人は、一緒にいて楽しいから許せるかもしれない。私は個人的にえり子が気に入っていた。昔はそのような人を周りは、いいものとは思っていなかったようだが、現代ではそのような人が多く現れるようになり、考えることにはならなかった。

八十一歳になる私の祖母は、祖父が亡くなって十年間、県南の田舎で一人暮らしをしている。たまに電話をかけたり、遊びに行ったりすると、「もう、何日も誰とも喋ってなかったんよ。」と恐ろしいようなことを、笑いながら言ったりする。そして嬉しそうに、時間をかけてたくさん話し、「喋ったら、元気が出たわあ。」と子供のように無邪気な顔をした。一人ぼっちに慣れている祖母も、さすがにロック解除されたように、寂しさから解き放たれ、明るくなる。人の心の動きは、やはり周りからの影響が大きいと思う。人間と人間は時間を共有して生きていくものだ。一人ぼっちなんか、有り得ない。残された人生は、まだまだ知らないことであふれているからだ。

何日もこの本を読み直して、みかげの感性の動揺も、よく分かった。私には、予想がつかなかったみかげの立場も少しは理解できた気がする。家族や友達としっかり話したり、田舎で一人暮らしをしている祖母にも、時々会いに行きあげたいと思う。そして、今の人生をほこりに思い、大切に生きていきたい。

(吉本 ばなな『キッチン』)

優秀作品 「当然」は幻だ

1年2組(電子制御工学科) 丸尾 優花

幸せとは何か。誰もが同じように幸せだと思えることはあるのだろうか。

「いろとおっしゃる所に落ち着いていることができますのが、まず何よりもありがたいことでございます。」喜助のその言葉が何か答えを導いてくれたように感じました。最初は悪人が登場する高瀬舟なら、その人物と自分の人生観を比較しやすく、書きやすいだろうと思い手にとりました。その時は自分の方が正しく、一般的な価値感を持っていると思い、罪をおかす人はどんなものかと読みはじめました。この予想は私が思っていた方向とは正反対ではあるものの当たっていました。それは悪人である喜助が私達人間が大人になると共に求める物、価値感の変化とは関係なくどんなに当然のことでも幸せを感じ、私達が本来目を向けて感謝すべきことをずっと心に忘れずにいる姿勢からでした。つまり、居場所があり自分を認めてくれる人がいる当然に思っていたことは当然ではないこと。そして感謝すべきことだと思われました。私達が小さい頃はささいなことで幸せを感じていたのも、大人になって自分の力で幸せを勝ち取ることも家庭という居場所があってこそで、当然に手にできるものではないとこの本から学びました。

しかし、喜助と自分とでは何が違うのかと思いました。もちろん生まれた時から今までずっと両親がそばにいて育てられた私と、幼い頃両親を亡くし、兄弟二人で生きてきた喜助とは違いは明らかです。また弟の自殺行為を手助けしたこと、から、「人殺し。」と言われ遠島になった喜助が口にしたことから思うことがありました。「お牢に入ってから、仕事をせず食べさせていただきます。わたくしはそればかりでもお上に対して済まない事をいたしているようでありませぬ。」

それに、お牢を出る時に二百文を持たされたことを感謝しています。ここから、今まで一生懸命働いて、生きて暮らしていけることだけで満足していたことがわかる。そしてお牢に入りその状況に驚く喜助の欲がなく、足ることを知っている観方には私も驚きました。その上、小さな事に喜びを感じれることも理解できたし、「もっともっと。」と手を伸ばさず、今に満足している喜助が羨しいと思えました。そう思える時点で、私は喜助とは全く違うんだな、と思いました。

誰もが上へ上へと手を伸ばし輝きたいと望んでいて、私もそうなんだろう、そうでなければだめなんだと思っ

ていました。でもこの本を読んで、自分を高めるのも大事だけれど、もっと自分の根本的な所を見つめ、大切にすべき本当に大事な物を一番目が届くところに置いておきたいと思えました。自分がしたいことに夢中になると忘れてしまうことはあると思いますが、日々感謝することを習慣にしようと思います。当然なんて思わず、大切な人はずっと離れず一緒に居てくれるなんて思わず、今しか向き合えない事や人との時間も生きる上で大事にしたいです。なぜならば、当然とは一定の時間に変化しないことから得た安心感から成る幻だと今私は思えるからです。

(森 鷗外『高瀬舟』)

優秀作品 「火花」を読んで

1年1組(情報工学科) 畑田 晋作

主人公の徳永と、徳永が師匠と仰ぐ先輩神谷との会話を主に物語は進められていく。花火会場の営業で出会い、神谷に一目惚れをした徳永が神谷から伝記を書けと言われ、そのために神谷の言った言葉、したことを綴るためのかもしれない。しかし、その会話は最初はクエッションマークが頭の中に飛びまくった。二人の会話が普通じゃない。理解できない。しかも、なぜ徳永が神谷に一目惚れしたのかが分からない。花火の中で誰も聞いてくれない中で漫才をする。いや漫才ではない。「死ぬ」などという言葉、ただただ叫び続けているだけの神谷をだ。これを最後まで読み続けられるのか不安になりながらページをめくっていった。

二人の夢は「おもしろい漫才をして一番になること」だ。最初は同じ方向を向いているように思えた。そして多用されているメールからは、相手を思いやりつつ、いかに「おもしろい」返信するか考えながら打つ。まるで、禅問答のようだ。難しく感じるはずだ。それに読むのに時間がかかる。

しかし微妙にすれ違いが出てくる。なぜなら「おもしろい」と判断するのは第三者、つまりはお客さんだったり、事務所の人だったりテレビ局の人だったりする。同じ夢のようで全く同じ夢というのは有り得ないのではないかなと思う。

徳永の方は事務所に後輩が入ったりテレビに出たりと環境が変わり、他の人との関わりができてくると、新たな「おもしろさ」についても自分にできる「おもしろさ」についても神谷とは、ずれてきたように感じる。神谷のように、「おもしろさ」について妥協ができないと、人に受け入れられづらいのかもしれないなと思った。そして、徳永に訪れる夢の終わり。その相方でないと夢は追い続けられないと徳永は普通のサラリーマンになる。それだけの相方に巡り合える人は、そうは居ないだろうと思う。私はそれだけ信頼のおける相方に、まだ出会えていないように思える。部活の先輩も、保育園や小学校から付き合いのある友達もいる。もちろん、どちらも尊敬できる部分も、信頼できる部分もある。ただ、自分をさらけ出すことが出来ないでいる。きっと、それが出来るようになったときに、お互いに信頼しあい、思いやり合い、欠点までも受け入れて長く付き合っていけるようになるのだと思う。

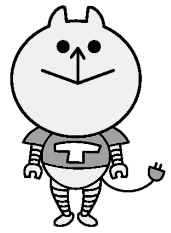
しかし神谷。最後に「えっ」と声を出さずにはいられないくらい驚いてしまった。神谷は「おもしろさ」の追求のあまり整形手術で胸を、それも巨大な胸を作ってしまったのだ。これくらいしたら徳永は笑ってくれるだろう。しかし、徳永は神谷のその行動を非難しつつも受け入れる。ただ昔とは違うのは神谷がしてしまったことに、「それはダメだ」と面と向かって言えたこと。神谷もそれを理解していること。その上で受け入れた。そして、出会った時のように二人で花火を見る。そんな風に師匠と慕っていた二人を本当に受け入れられるのだろうかと思う。昔のように花火を見ながら、でも決して昔と同じでない二人を想像しながら、不思議な気持ちで本を閉じた。

だが、私は二人の、もう少し先を知りたいと思ってしまった。もう少し先に、私に必要な何かがあるような気がしてならないから。

(又吉 直樹『火花』)

ご存知ですか、図書館の使い方

ぜひ積極的に図書館を利用しましょう



学習のための多様な活動空間

- 専門書、一般書、小説
- 電子ジャーナル、データベース
- パソコン、プリンタ
- インターネット、校内Wi-Fi
- 広い机、ホワイトボード
- ミーティングルーム



本を借りる

📖 貸出期間は2週間、貸出冊数は5冊で、貸出には学生証が必要です。

📖 返却は図書館カウンターもしくは寮のブックポストに返却してください。

Topics!



図書館ツイッターやっています。
@TsuyamaKosenLib



図書館にある本を探す

📖 蔵書検索（OPAC）で請求記号を調べて、その記号の書棚の場所に行きましょう。

📖 書棚の本は分野別に並んでいるので、興味がある分野の書棚を探してみましょう。

市立図書館の本を取り寄せる

📖 市立図書館蔵書検索（OPAC）で予約し、受取場所を本校に指定しましょう。



Topics!



図書館入り口手前のエレベーター横に自動販売機が設置されました。ただし、図書館ではフタ付き容器に入っている飲み物以外は禁止されていますのでご注意ください。

※今回設置された自動販売機の飲料水は全てフタ付きです。



本をリクエストする

📖 学生希望図書の申込用紙を図書館カウンターに提出しましょう。

論文を調べる

📖 図書館WEBサイト記載の電子ジャーナル・データベースを利用してみましょう。

過去の卒業研究を閲覧する

📖 全て図書館に所蔵しているわけではありませんが、多くの卒業研究が図書館奥の集密書架にありますので、探してみましょう。なお、一部を除き持出・複写不可です。

レポートを作成する

📖 PCは図書館専用PCと総合情報センターアカウントで使用するPCがあります。

📖 プリンタは両面印刷可能、カラー印刷はできません。節度ある利用を心掛け、安易な大量印刷は控えましょう。

📖 ノートPCを図書館カウンターで貸出しています。

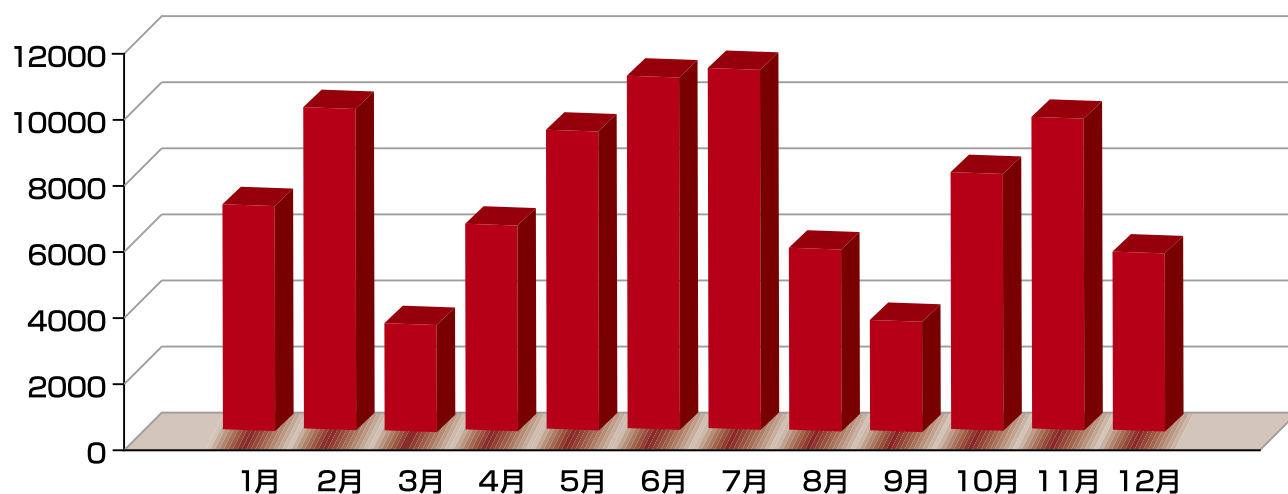
📖 校内Wi-Fiの使用は総合情報センターでの申請が必要です。

グループで学習する

📖 ミーティングルームが利用できます。図書館カウンターで予約、申し込めましょう。

入館者数 2015

(期間：2015年1～12月)



貸出ランキング 2015

No.	書 名	著 者	出版社
1	編入数学徹底研究	桜井基晴	聖文新社
2	面白いほどよくわかるローマ帝国	金森誠也 (監修)	日本文芸社
3	TOEICテスト新公式問題集	Educational Testing Service	国際ビジネス コミュニケーション協会
3	演習水力学	国清行夫、木本知男、 長尾 健	森北出版
3	宇宙兄弟 25	小山宙哉	講談社

(期間：2015年1～12月)

編集後記



私は今回初めて図書館報の編集に参加させていただきました。昨年も私は図書委員でしたがブックハンティング班でした。今年もブックハンティング班希望でしたが、希望者が多かったので図書館報班に参加することにしました。そして、この班で何をするのか分からない段階で私が班長に任命されました。他の班は上級生が班長の所が多かったので私みたいな人間が班長で活動が成り立つのかとても不安でした。実際、班員や関係者には迷惑をおかけしたと思います。(編集後記の原稿がメ切に間に合わ

なかったのはここだけの話…) それでも協力していただいた皆様にはとても感謝しています。

今回図書館報を編集するにあたって、読んでくださる皆様が読みやすいように作成しました。この図書館報を読んでくださった皆様が少しでも図書館や本に興味を持てただけであれば嬉しいです。

最後に、この図書館報の編集に参加して下さった皆様、本当にありがとうございました。

(機械工学科2年 坂本 直紀)

発行

独立行政法人 国立高等専門学校機構
津山工業高等専門学校図書館